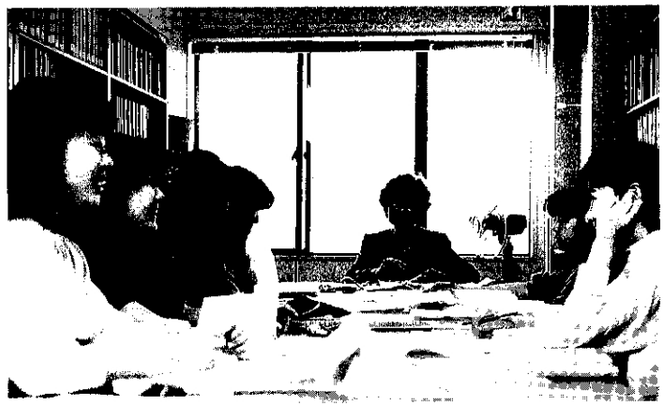
RI★WAC
Research Institute for Women and Careers
日本女子大学現代女性キャリア研究所

RIWAC 管理番号	RJO0028
調査タイトル	「新制家政学部卒業生に対する調査」
論文／雑誌名	2「新制家政学部卒業生に対する調査から」 (「Ⅲ家政学部卒業生実態調査からみる家政学部像」の一部) 『日本女子大学家政学部 100 年の歩み』
著者	沖田富美子、塚原典子
掲載ページ	pp.111-141.
発行年	2006.05
出版社	日本女子大学家政学部 100 年研究会



被服学科（被服材料学実験）1989年



家政経済学科（経済学・生活論演習）1995年





家政学部を考える会シンポジウム　2000年



家政学部共通（コンピュータ）2000年

目　次

はじめに　江澤郁子…… 3

Ⅰ　創立者成瀬仁蔵の家政学部構想　一番ヶ瀬康子…… 5

Ⅱ　家政学部の教育内容およびその変遷

1　旧制　館岡孝、赤塚朋子…… 10

2　新制　宮崎礼子、赤塚朋子… 26

3　通信教育課程　赤塚朋子…… 85

Ⅲ　家政学部の卒業生実態調査からみる家政学部像

1　大正期および昭和前期の本学卒業生に対する調査から　真橋美智子… 95

2　新制家政学部卒業生に対する調査から　沖田富美子、塚原典子…111

3　通信教育課程卒業生に対する調査から　真橋美智子…142

4　家政学研究科修了生に対する調査から　佐々井啓…147

Ⅳ　家政学部卒業生の社会的展開

1　学位取得者に関する調査　館岡孝…153

2　外国人留学生について　大野静枝…161

3　旧制・新制・通信教育－卒業後の社会的活動領域　宮崎礼子…163

Ⅴ　今後の家政学部に向けて

1　学部として　大野静枝…171

江澤郁子

佐々井啓

2　各学科より

児童学科　石井光恵…173

食物学科　丸山千寿子…174

住居学科　定行まり子…175

被服学科　大塚美智子…177

家政経済学科　堀越栄子…178

おわりに　江澤郁子…181

資料　日本女子大学家政学部100年の年表　赤塚朋子…183

まとめ

大正・昭和前期は良妻賢母が女性の生き方の理想とされ、依然として女性に高等教育は不要とみなされた時期である。しかし、女子高等教育在籍者数の推移をみると、1920年代頃から大幅に増加し、1930年以降の昭和恐慌期の低迷を経て、1937年からは再び急増している。その中で最も多くを占めた私立の女子専門学校の在籍者数は、1910年を基準にすると1925年には10倍に、1935年には20倍となっている。（注３）本稿が対象とした時期は、このように女性の高等教育が量的に拡大した時期に重なる。

大正期から昭和前期にかけての本校家政学部卒業生の入学前、入学時、在学時、卒業時、卒業後の家政学部像について探ってきたが、２つの調査からみる限りその家政学部像は「家政」「師範家政」「社会事業」でかなり異なっている。つまり「家政」では入学時から卒業後まで一貫して広い視野や教養が求められ、資格にとらわれない自由な学習を通して教養を深め、同時に実践的な学びを身につけ、それらを家庭生活に生かす者が多くみられる。また「師範家政」では入学時に家事科教員免許の取得、経済的自立を目指す者が比較的多く、実際に在学中に取得した資格や専門が職業生活、特に教員として生かされている。一方「社会事業」では将来の社会貢献や専門の勉強を期待して入学し、実際に受けた専門教育を、卒業後職業生活や社会活動に生かす者が多い。こうした各学部の特質とともに、本校の教育の精神教育や人間形成への影響を評価する点では家政学部卒業生に共通しており、こうした点も本校家政学部の特質といえる。

また本稿では詳しくは述べなかったが、大正期と昭和前期の卒業生を比較した場合、入学動機、卒業後直後の進路やその後の職業経験・社会活動経験などに違いがみられた。戦争の影響や社会の変化もあるが、前述した女性の高等教育の拡大も当然影響していると思われる。これらの点については今後の課題としたい。

以上のような旧制の本校卒業生の家政学部像が、敗戦後新制大学となってどのように推移していくかは次項２でみていく。

２　新制家政学部卒業生に対する調査から

１）調査の目的及び方法

日本女子大学家政学部の卒業生が、家政学部の教育をどのように評価しているかを明らかにすることが、本調査の目的である。特に新制卒業生の卒業後の生活及び意識の動向を調査・分析することにより、本大学家政学部の教育の特色を明らかにすることができるであろうと考えた。なお本稿では、時代的（年齢的）な違いをより明確にするため、卒業生の回生別に分析した結果についてまとめる。

調査としては、家政学部（学科）を選択した動機、家政学部での教育の卒業後の生活への影響、卒業後の動静、家政学部での教育の評価などの内容を中心としたアンケート調査を実施した。

調査対象は、新制入学以降の卒業生である。これらの卒業生は、現在（2000年度）50回生までになっており、49,096人の卒業生を輩出している。そのうち今回は、新１回生から新40回生までの卒業生総数16,890人の1／4にあたる4,245人を対象とした。調査方法は、各回生ごとに卒業生名簿から無作為に抽出し、アンケート調査用紙を郵送により配布、指定の期日までに郵送で回収する方法とした。調査時期は1999年９月から1999年10月である。配布数4,245人、回収数1,825人、回収率は43.0％である。回生別調査対象の回収数を表Ⅲ-20に示す。

なお、本稿では回生を新制１回～新制10回まで（1951年～1960年卒業）、新制11回～新制20回まで（1961年～1970年卒業）、新制21回～新制30回まで（1971年～1980年卒業）、新制31回生～新制40回生まで（1981年～1990年卒業）の４つに分類する。それぞれの回生グループを、以後順に１期生、２、３、４期生と省略して記述する。なお１期生の時代は新制教育が開始され、児童・食物・生活芸術（住居専攻と被服専攻）・社会福祉・家政理学一部・二部の６学科で構成されていたが、後半に社会福祉が文学部へ移行している。次の２期生の時代には生活芸術科の住居と被服がそれぞれ独立した学科に、また新しく家政経済学科が開設されるという動きのあった時代である。３期生の時代は学部構成には変化のない時期であるが、社会的には経済高度成長時代である。最後の４期生の時代も学部としては大きな変化はないが、家政理学科の理学部への移行準備が始まっている。社会的にはバブル景気が最長点に達した時期であるといえる。

また一部分ではあるが、前項でもちいた1982年実施の「昭和前期の本学卒業生に対する調査」（旧制26回生から旧制43回生、1929年卒業から1965年卒業）の結果との比較を試みる。特に本稿では、昭和前期の専攻学部のうちの家政、師範家政、社会事業学部の卒業生1,040人により分析した結果を用いる。なお1982年実施の調査を昭和前期の調査、

表Ⅲ-20

調査対象　卒業年次別回収数　（人・％）

		1期生	2期生	3期生	4期生
		1951～1960	1961～1970	1971～1980	1981～1990
児童		47　19.1	61　17.6	88　15.7	90　13.8
食物		69　28.0	76　22.0	111　19.8	117　17.9
社会福祉		24　9.8	-----	-----	-----
理Ⅰ	物理	4　1.6	11　3.2	18　3.2	31　4.7
	数学	3　1.2	18　5.2	42　7.5	57　8.7
	化学	9　3.7	13　3.8	29　5.2	43　6.6
理Ⅱ		15　6.1	28　8.1	43　7.7	55　8.4
住居		34　13.8	49　14.2	78　13.9	87　13.3
被服		41　16.7	61　17.6	77　13.7	93　14.2
家政経済		-----	29　8.4	76　13.5	80　12.3
全体		246	346	562	653

＊学科・卒業年次不明　18名を除く

今回実施した新制卒業生を対象とした調査を、昭和後期の調査と呼称する。

2）調査対象者の概要

調査対象とした卒業生は、前述したように新制1回生から新制40回生と限定したため、年齢としては、全体的には30代前半から70代前半とかなり広範囲にわたっている。なお今回分類した回生別では、1期生が一番高齢のグループで60代にあたり、2期生が50代、3期生が40代、4期生が30代にあたり、一番若いグループといえる。

調査対象者の91％が既婚者である。この傾向は1期生から3期生までは変わらないが、4期生では既婚者の割合はやや減少し、未婚者が14.3％とやや多くなっている。家族人数は1期生は2人家族（50.0％）が、そのほかの2、3、4期生はいずれも4人家族が（33.5％、40.0％、35.7％）一番多い。しかし次に多いのは2期生と4期生は3人家族（24％以上）、2人家族（11％以上）であるが、3期生は5人家族（22.1％）である。なお子供の人数は2人が一番多いのは回生による違いはないが、1から3期生では次に多いのが3人（21％以上）であるのに対し、4期生のみ1人（26.4％）とするものが多い。

平均子ども人数は、1から3期生は2.2人、4期生のみ1.8人である。4期生はまだ年齢が若いということもあるが、やはり少子化現象が明らかに示されていると言える。同居家族は夫、子供が一番多いが、その割合は回生により多少異なっている。すなわち1期生の場合、子供との同居の割合が少なく（29.1％）、特に単身（13.2％）とするものが他の期に比べ多いのが、また2期生の場合母（8.7％）や義母（9.9％）と同居しているものの割合が多いのが目立つ。したがって1期生は単身か夫と二人だけの家族であり、2～4期生は夫と子供によるいわゆる核家族が多いが、2、3期生に義親、4期生に親と同居しているいわゆる拡大家族もいる。これら調査対象者と親との居住形態の関係については、はっきりとした傾向はとらえられないが（その他とするものが6割を占める）、隣居、近居、同一アパート内、同一マンション内、同一敷地内の範中では、近居とするものが一番多く（27.5％～31.6％）、同一敷地内とするものは1割弱である。この傾向はいずれの回生も同じである。

表Ⅲ-21

子どもの人数　（件・％）

	昭和　後期　卒業年次					昭和前期 1929-1945
	1951-1960 (225)	1961-1970 (317)	1971-1980 (502)	1981-1990 (522)	合計 (1566)	(1442)
子どもなし	12　5.3	18　5.7	35　7.0	87 16.7	152　9.7	131　9.1
1人	24 10.7	35 11.0	79 15.7	138 26.4	276 17.6	203 14.1
2人	125 55.6	185 58.4	249 49.6	225 43.1	784 50.1	459 31.8
3人	54 24.0	68 21.5	123 24.5	64 12.3	309 19.7	348 24.1
4人	8　3.6	11　3.5	13　2.6	8　1.5	40　2.6	183 12.7
5人	1　0.4	------	2　0.4	------	3　0.2	74　5.1
6人	------	------	------	------	------	27　1.9
7人以上	1　0.4	------	1　0.2	------	2　0.1	12　0.8

なお昭和前期の卒業生と昭和後期の卒業生の傾向を比較すると、昭和前期の卒業生の場合既婚者が94.5％となり、昭和後期の卒業生の既婚者の割合の方が若干ではあるが少なくなっている。それに対し未婚者の割合は昭和後期の卒業生の方が多くなっている。また子どもの人数については、表Ⅲ-21に示すように、昭和前期（国文、英文、本科、高等を含む全学部）、昭和後期ともに2人が最も多く、次いで3人、1人の順になっているのは同じである。しかしその次に多いのは昭和前期は4人であるのに対し、昭和後

期は子どもなしとなり、両者の傾向はやや異なっている。特に昭和前期の卒業生の子ども数は、1人から4人までで8割を占めるのに対し、昭和後期の卒業生では1人から3人までで9割弱を占めており、子どもの数が明らかに減少していることを示している。

今回の調査対象者の学生時代における寮生活経験については、全体的には未経験のものの方が多いが、寮生活経験者は1期生（44.3%）に多く、2、3期生（42.1%、24.3%）の順に減少し、4期生（17.3%）の経験者が一番少ない。なお昭和前期の場合、寮生活経験者（65.0%）の方が未経験者（30.4%）より多かったのに対し、昭和後期の場合未経験者（72.2%）の方が経験者（27.8%）より多く、その傾向は逆転している。前者の場合家政学部に地方出身者が多かったことと関連していると記述されているが、後者の場合は必ずしもそうとは言えないであろう。

出身校が共学か女子校かについては、全体的には女子校出身者がやや多くなっているが、回生別では1、2期生に女子校出身者が多いのに対し、3、4期生では共学と女子校がほぼ半々を占めている。

3）入学前の家政学部像

前述したように、家政学部は初期には児童、食物、住居、被服、社会福祉、理Ⅰ（物理、数学、化学）、理Ⅱ生物などの7学科で構成されていた。1958年社会福祉が文学部へ移行（その後1990年人間社会学部に）、その後家政経済が新設されまた7学科にもどった。しかしその後1992年には理Ⅰ、理Ⅱが理学部に独立したため、現在の家政学部は5学科により構成されている。

入学前の家政学部像としては、入学の際の志望動機すなわち学科選択動機からとらえることとした。各回生別の学科選択動機を表Ⅲ-22に示す。

全体的には、「その学科が自分の適性に合っていると思った」とするものが一番多く、次に多いのが「専門の勉強がしたかった」である。この傾向は回生別によっても同様であるが、「その学科が自分の適性にあっていると思った」とするものは4期生に最も多く、2期生、3期生と減少し、1期生が最も少なくなっている。一方「専門の勉強をしたかった」とするものは、1、2期生では4割弱であるのに対し、3期生は4割強、4期生は約半数と増加するなど、その傾向は回生により異なる。特に「資格・免許をとりたいと思った」「女性としての将来に役立ちそう」という動機をあげたものは回生にかかわらず多いが、前者の動機をあげたものは3、4期生に、後者は1、2期生に多い。そのほか1期生の場合「両親にすすめられた」、3期生に「ここしか合格しなかった」とするものが多いのが目立つ。以上のことから、回生による区別はなく、それぞれが自分の適性にあった学科を選択していると言える。しかし回生が若くなるほど（3、4期生）、資格・免許の取得や専門の勉強への意欲が強くなっていると言える。なおその他

表Ⅲ-22

学科選択の動機　（件・%）

学科選択動機内容	昭和 後期 卒業年次					昭和 前期 1929-1945 (1040)
	1951-1960 (246)	1961-1970 (344)	1971-1980 (562)	1981-1990 (653)	合計 (1805)	
専門の勉強がしたかった	92 37.4	129 37.5	247 44.0	348 53.3	816 45.2	165 15.9
家政学部発祥の大学だから	41 16.7	39 11.3	38 6.8	27 4.1	145 8.0	------
教えを受けたい先生がいた	10 4.1	8 2.3	10 1.8	6 0.9	34 1.9	73 7.0
就職に有利だから	2 0.8	8 2.3	16 2.8	45 6.9	71 3.9	------
卒業後経済的に自立したい	30 12.2	38 11.0	68 12.1	73 11.2	209 11.6	53 5.1
将来社会の役にたちたい	46 18.7	52 15.1	54 9.6	55 8.4	207 11.5	116 11.2
両親にすすめられた	67 27.2	60 17.4	78 13.9	77 11.8	282 15.6	304 29.2
資格・免許をとりたい	58 23.6	78 22.7	169 30.1	226 34.6	531 29.4	161 15.5
親戚・知人や先輩が学んだ	46 18.7	46 13.4	58 10.3	40 6.1	190 10.5	291 28.0
教師にすすめられた	10 4.1	10 2.9	23 4.1	25 3.8	68 3.8	84 8.1
女性としての将来に役立ちそう	65 26.4	87 25.3	127 22.6	132 20.2	411 22.8	------
ここしか合格しなかった	6 2.4	22 6.4	87 15.5	64 9.8	179 9.9	------
学科が自分の適性に合っている	110 44.7	199 57.8	310 55.2	383 58.7	1002 55.5	189 18.2
日本女子大に入りたかった	7 2.8	14 4.1	23 4.1	22 3.4	66 3.7	92 8.8
その他	7 2.8	25 7.3	26 4.6	33 5.1	91 5.0	60 5.8

としての自由記入から、1期生の場合「両親が他を受けさせてくれなかった」（食物7）、「地方出身として寮があることで親の承諾が得られた」（被服8）、2期生では「寮がしっかりしている」（被服12　家政経済18　食物20）、「他の大学にはない学科なので」（家政経済12、住居18）、3期生では「受験科目に数学があった」（被服23　児童24　家政経済25　食物27）、4期生では「興味のある学科、科目があったので」（被服33　児童34　理1数学35）などと言う動機をあげるものもいる。

この傾向を昭和前期の卒業生と比較すると（表Ⅲ-22参照）、動機の選択項目が必ずしも一致していないので断定はできないが、昭和前期の卒業生の場合「両親にすすめられた」「親戚・知人や先輩に本学を学んだものがいた」を選択動機としたものが多いのに対し、昭和後期の卒業生の場合、「その学科が自分の適性にあっている」「専門の勉強をしたかった」とするものが多い。したがって両親や周囲の影響がみられる昭和前期と違って、昭和後期の卒業生は、入学当初からかなりはっきりした自分の意志を持ち、積極

的な意図を持って入学してきていると言える。このことは以下の点からも裏づけられる。すなわち学科による選択動機は、総体的には大きく異なってはいないが、児童、理Ⅰ、被服、家政経済はどちらかというと「自分の適性にあっていると思った」という動機を、理Ⅱ、住居は「専門の勉強をしたかったから」という動機を選択したものが多い。そのほか食物は「資格、免許をとりたいと思った」、社会福祉は「何か将来の役にたちたいと思った」、児童では「子供が好きで幼稚園の先生になりたかった」、食物では「食べ物は生きている限り、なくてはならないものだから」、住居および家政経済では「ほかにあまりない学科だったから」など、それぞれの学科の特殊性や大学の教育にかかわる内容が動機となっていることに示される。

4）大学在学時の家政学部像

そこで卒業生が学生時代に受けた家政学部での教育を、どのように評価しているかについて、また在学中に取得した資格について分析する。

（1）家政学部の共通専門科目について

本学の家政学部の特徴として、家政学部共通専門科目があり、家政学部の学生は一部ではあるが取得しなければならないことがあげられる。このような方針は1931年の家政学部の学制改革において始まっている。

そこで1948年新制大学として発足して以来、継続している家政学部共通専門科目（家政学一般）の履修に対する意見を具体的に記入してもらった結果、78％の卒業生が意見をよせている。全体的には「広い視野を得られた」「受講して良かった」「卒業後生活に役にたった」など肯定的な意見のものが多く、「役にたたなかった」「早く専門を学びたかった」「不必要」などとするもの、「良く覚えていない」「当たり前として受けた」「特になし」などと、多少違和感を感じていたものもいる。学科別では被服を筆頭に食物、家政経済、児童は各卒業生の6割以上のものが受け入れているのに対し、社会福祉、住居の場合は4割となり若干その割合が減少しているのが特徴的である。なお現在理学部となった理Ⅰ・Ⅱの卒業生の場合、肯定的な意見のものもほかの学科と同様4割いるが、どちらかと言うと否定的な意見のものの方が多いのが目立つ。

回生別では表Ⅲ-23に示すように、共通科目の授業を受けたことに対し肯定的な意見のものは、1期生が一番多く、2期生、3期生の順に減少し、4期生の割合が一番少ない。一方否定的な意見のものは、若い4期生に一番多いが、次に多いのが2期生である。「当たり前と思った」「仕方なし」「何も感じなかった」「覚えていない」「特になし」などとする意見のものが3期生に最も多い。したがって高年令の世代よりも、若い世代になるほど家政学部共通専門科目の履修に疑義を感じていると言える。しかし「今考えると良かった」「結婚してみると大変役だっていることが多い」「仕事をする上で役立ち感謝している」などとする意見もあり、学生時代にはその意義がわからなくても、卒業後にその意義が理解される科目となっていると言える。

なお家政学部共通専門科目を履修して良かった点の自由記述の一部をあげると以下のようになる。「一般教養として必要」（32理Ⅰ化学）、「人格形成に良い」（1食物）、「視野を広げるのによい」（28被服）、「他学科の専門科目に触れられる」（28理Ⅰ物理）、「幅広く履修できて良かった」（20家政経済）、「家政学部について理解が深まったことと、人間としての生活にかかわりの多い内容で興味深かった」（35住居）、「色々な考えに接することができた」（10生芸）、「家庭生活に役だった」（8被服）、「学科以外の友人と幅広く知り合えた」（14理Ⅱ）などである。

表Ⅲ-23

家政学共通専門科目をうけての評価　（人・％）

卒業年次	良いと思う	特になしあまり感じなあたり前	良いとは思わない	合計
1951～1960（246）	145　68.7	27　12.8	39　18.5	211　85.8
1961～1970（346）	171　59.0	42　14.4	77　26.6	290　83.8
1971～1980（562）	248　56.8	84　19.2	105　24.0	437　77.8
1981～1990（653）	241　52.7	82　17.9	134　29.3	457　70.0

（2）家政学部の教育の良かった点、問題点について

次に家政学部の教育に対する意見として、教育を受けて良かった点、問題点についての自由記述意見をまとめた結果を、表Ⅲ-24～Ⅲ-25に示す。良かった点については61.9%、問題点については41.4%の卒業生から自由意見がよせられた（両者ともに‘特になし’という意見は含まない）。

まず家政学部の教育の良かった点については、表Ⅲ-24に示すようにその内容から大きく7項目に分けられる。すなわち「家政学部の教育内容に関するもの（さらに5項目に細分類）」「人との出会いに関するもの」「家政上の技術の修得に関するもの」「職業、資格取得に関するもの」「人間形成、価値観の確立に関するもの（さらに2項目に細分類）」「学校の雰囲気、伝統に関するもの」「自負、自信に関するもの」である。

全体的に「家政学部の教育内容に関するもの」を評価するものが一番多いが、中でも「実学、実生活に役立った」「幅広い教育、広い視野をもてた」などの点を評価するものが多い。そのほか「人間形成、価値観に関するもの（考え方、行動の基礎、価値観の形成につながった、女性として、人間としての教育など）」を高く評価している。

回生別にみると1期生の場合「家政上の技術の修得に関するもの（実生活に、料理、家庭管理などに役立つ、主婦となり役だった、児童・子供の教育に役立つなど）」を良かった点とするものが一番多く、次に多いのが家政学部の教育内容の一項目である「実学、実生活に役だった教育、生活に密着した内容、生活者としての視点からの教育」などが良かった点とするものが多い。2期生では「人間形成、価値観の確立に関するもの」が一番多く、次に多いのが1期生と同様、家政学部の教育内容に関するもので、特に「実学・実生活に役立つ」および「幅広い教育、広い視野を得たこと」を良かったとするものが多い。3、4期生では家政学部の教育内容に関するもので、特に「実学、実生活に役だつ」をあげるものが一番多くなっているのが、1、2期生と異なる点である。なお次に多いのが3期生は「人間形成、価値観の確立に関するもの」であるのに対し、4期生は家政学部の教育内容の一つである「幅広い教育、広い視野を得た教育」をあげるものが多く、その傾向は異なっている。なお全体的にみて、家政学部の教育内容の中で一番多い「実学、実生活に役立つ教育」をあげるものは、1、2期生よりも、3、4期生に認めるものが多くなっていること、「家政上の技術の修得に関するもの」を良く評価するものは、1期生のみに特に多いこと、「人間形成、価値観の確立に関するもの」を良く評価するものは2期生に一番多く、3、4期生になるにつれその割合は減少するなどの特徴があげられる。したがって家政学部の教育内容は、回生にかかわらず卒業生に高く評価されていると言える。ちなみに代表的な意見をあげると以下のようになる。

「広い視野にわたって知識を得ることができたと思う。学問としての基礎を学ぶことができた」（13児童）、「専門的な分野について深く学習することができた」（34理Ⅰ化学）、「生活に密着したものを、体系的に学ぶ姿勢や視点をとらえることの重要性を学んだ」（16被服）、「さまざまな視点で毎日の生活について考え、問題意識をもつことができた」（37家政経済）、「それまでもっていた良妻賢母を育成するのに適当な学部というイメージが正され、女性の自立を促すのに適した学部、学問としての家政学を理解できた」（38住居）、「素晴らしい女性指導者達に巡り会えた」（11家政経済）、「多くの生涯の友人を得られた」（22理Ⅱ）、「卒業後、女性の先頭にたって活躍している先輩に出会えた」（39住居）、「家庭生活、子育てに大いに活用できたと思う」（11児童）、「専門を生かした職業に就くことができた」（24食物）、「栄養士の資格が取得でき、食品の安全性や健康に対して常に考えるようになった」（31食物）、「人間として家庭、社会での生活をしていく基礎を学べて良かった」（2社会福祉）、「アットホームな雰囲気がよかった。時間にゆとりがあり、後の人生に幅ができた」（26被服）などである。

ちなみに学科別では、家政学部の教育内容に対しては、「実学、実生活に役だった」

表Ⅲ-24

家政学部の教育の良かった点（自由意見）　（件・%）

		1951～1960（178）	1961～1970（233）	1971～1980（332）	1981～1990（376）
家政学部の教育内容にするもの	広い視野、幅広い教育、広い知識、広い分野 基礎・常識・教養が身についた、学部共通科目	22 12.4	36 15.5	40 12.1	66 17.6
	専門的な教育内容、学びたいことを学べた ある授業が良かった	6 3.3	10 4.3	16 4.8	42 11.2
	実学、実生活に役立つ、生活に密着した内容 生活者としての視点	32 18.0	44 18.9	74 22.3	79 21.0
	科学的な視点、問題意識をもつようになった	5 2.8	8 3.4	9 2.7	6 1.6
	衣食住、家庭の大切さ、家政学の重要性を知った	15 8.4	14 6.0	31 9.3	26 6.9
人との出会い（教員、友人、先輩）に関するもの		10 5.6	16 6.9	34 10.2	26 6.9
家政上の技術の修得に関するもの		40 22.5	18 7.7	26 7.8	23 6.1
職業、資格取得に関するもの		9 5.1	21 9.0	16 4.8	35 9.3
人間形成、価値観の確立に関するもの		26 14.6	50 21.5	64 19.3	52 13.8
	考え方、行動の基礎、価値観の形成につながった	(17 9.5)	(27 11.6)	(26 7.8)	(29 6.7)
	女性として、人間としての教育、生きる力	(9 5.1)	(23 9.9)	(38 11.5)	(23 6.1)
学校の雰囲気、伝統に関するもの		4 2.2	11 4.7	18 5.4	16 4.3
自負、自信に関するもの		9 5.1	5 2.1	4 1.2	5 1.3

を評価するものが児童（「広い視野を得た」とするものがほぼ同じである）、食物、住居、被服、家政経済のいずれの学科も多いが、そのほか食物では「専門的な内容を学べた」、住居、家政経済では「人間の基礎、家政学の重要性を知った」、被服では「広い視野を得た」ことを評価するものが多くなっている。教育内容以外の項目としては、食物に「家政上の技術の取得」を評価するものが多いのが目立つ。なお児童、住居、被服、家政経済ともに「人間形成、価値観の確立に関して」の評価が高くなっており、学科により若干評価の内容は異なっている。なお理学系については、今回の調査対象者419人中、自分の受けた家政学部の教育に対し、良かった点および問題点の自由記述をしたものは42.2%、43.9%である。従って理学系の卒業生であっても、約4割のものが家政学部の教育の良さを認知していると言えよう。この傾向は回生による大きな違いはない。

次に家政学部の教育についての問題点に対しては、749人から意見がよせられた（自由記述）。回生別の結果を表Ⅲ-25に示す。問題点としては大きく8つにわけられる。すなわち「家政学部の社会的認知が薄い」「幅広い分野を学ぶことができたが、専門性に欠けると感じた」「グローバルなダイナミックな視点の欠如」「他学部、他大学との交流がなかった」「家政学部に属すること、家政学部の名称、家政学士に抵抗がある」「各分野の専門にはしり、学部としての総合性に欠ける」「実生活に役にたたない、浅くしか学べない」、「その他（設備不十分）」などである。

表Ⅲ-25

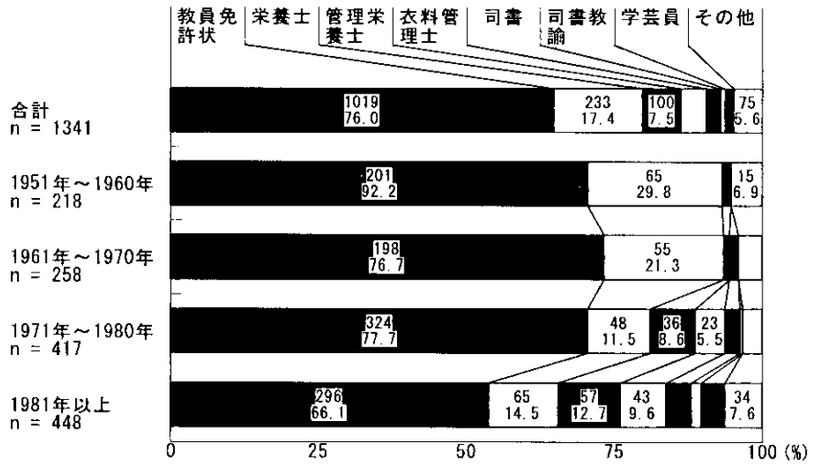
家政学部の教育の問題点（自由意見）　（件・%）

問題点の内容	1951～1960 (104)	1961～1970 (150)	1971～1980 (234)	1981～1990 (261)
家政学部の社会的認知が薄い（社会的評価が低い、学問的位置づけが不明確）	6 5.7	24 16.0	38 16.2	42 16.1
幅広い分野を学べるが、専門性に欠ける（専門分野が限られる、中途半端、独自性の欠如）	34 32.7	48 32.0	68 29.1	67 25.7
グローバル・ダイナミックな視点の欠如（視野が狭い、狭い分野の学問、女性という甘え）	5 4.8	14 9.3	28 12.0	27 10.3
他学部・他学科との交流がない（閉鎖的）	2 1.9	1 0.7	1 0.4	6 2.3
家政学部にあること、家政学士、名称に抵抗がある	4 3.8	3 2.0	24 10.3	49 18.8
各分野の専門に走り、学部としての総合性に欠ける	5 4.8	11 7.3	9 3.8	9 3.4
実生活に役立たない、浅くしか学べない	23 22.1	20 13.3	21 9.0	28 10.7
その他（設備、授業、資格、教員、雰囲気、進学）	25 24.0	29 19.3	45 19.2	33 12.6
特になし	11	18	23	49

表より全体的には、「幅広い分野を学べるが、専門性にやや欠ける」という意見をあげるものが一番多く、次に多いのが（その他を除く）「家政学部の社会的認知の低さ」である。特に前者の問題点は、回生にかかわらずどの回生も一番多くあげている問題点であるが、1期生の場合「実生活に役立たない、浅くしか学べない」をあげるものが次に多いのに対し、2期生は「家政学部の社会的認知が低い」ことを問題点とするものが多くなっている。3、4期生もほぼ同様の傾向にあるが、3期生の場合「グローバルなダイナミックな視点の欠如」を、また4期生の場合「家政学部の名称および家政学士に抵抗、家政学部に属していること」を問題とするものが多くなっているなど、回生によりその傾向は若干であるが異なっている。

（3）在学中に取得した資格

在学中にとった資格については、74.6%のものが何らかの資格を取得している。特に1期生の場合88.6%のものが資格を取得しているが、2期生74.6%、3期生74.2%、4期生68.6%と資格取得者の割合は、わずかづつではあるが減少している。取得した資格は図Ⅲ-1に示すように、どの回生も教員免許が最も多いが、栄養士を取得したものが次に多い。教員免許については、1期生の場合9割強のものが取得しているのに対し、若い回生になるほど減少している（1期生92.2%～4期生66.1%）。また栄養管理士、衣料管理士は、これらの制度の充実により、3期生から徐々に取得者が増加しており、若い世代のものの資格取得の種類が広がっている。なお教員免許としては、中学、高校の免許が多く、次に幼稚園、小学校となっているが、その傾向には回生による差異はない。



図Ⅲ-1．在学中に取得した資格

これらの資格の他に取得したもの（自由記述）として、調理師、衛生管理士、生活改良普及員、簿記、英検、秘書検定、情報処理技術者などがあげられている。特に1期生の場合調理師（食物）を、2期生の場合は衛生管理士（食物）を、また3期生の場合は簿記（家政経済）、自動車免許（児童、食物、理Ⅰ化学）を、4期生では秘書検定及び英検（あらゆる学科）、簿記（経済、住居）、情報処理（理Ⅰ物理、数学）、繊維製品品質管理士（被服）など、時代とともにとる資格の種類が広がっている。

5）卒業時の家政学部像

卒業時の家政学部像としては、卒業直後の進路状況から分析する。

卒業直後の進路については、全体的には8割のものが「職業についた」としている。このすぐ職業につくものが多いという傾向には、学科および回生による違いはないが、その割合は異なっている。まず学科別では理学系の理Ⅰと住居、家政経済の8.5割以上のものが職業についたとしているのに対し、理Ⅱと被服が8割弱、児童、食物、社会福祉は7.5割となりやや減少している。そのほか「さらに勉学を続けた」とするものが（1割弱いる）児童、理Ⅱ、住居、被服に、また卒業直後「結婚した」とするものが児童、食物に多いなど、若干ではあるが学科により違いがある。

次に「職業についた」とするものを回生別でみると、表Ⅲ-26に示すように1期生では60%台であったのが、2期生では70%台、3期生では80%となり、4期生になると90%と急激に増加している。そのほかの特徴としては、「さらに勉学を続けた」とするものは全体的にも1割弱にすぎないが、その割合は1期生から4期生へと徐々に増加していること、一方「結婚した」とするものが、1期生に2割弱いたのに対し、2期生は1割に、3期生は1割弱へと減少していることなどがあげられ、回生により卒業直後の動きに違いがあることが示される。

なお昭和前期の卒業生の進路として多いのは、「職業に就いた」「結婚した」「稽古ごとなどの修業をした」の3進路で全体の8割弱を、中でも「家事の手助けをした」「結婚した」とするものが1／3を占めている。一番多い「職業に就いた」とするものでも、昭和後期の卒業生で職業に就いたとするものの半分の割合しかおらず、昭和後期の卒業生の進路とは大幅に変化していることが示される。

そこで卒業直後、職業についたもののその業種、職種、勤務形態などについてみると、全体的には業種では「教育」（23.9%）、「製造」（17.2%）、「建設」（10.6%）が多く、職種では「事務・秘書」（23.9%）、「教員」（21.3%）、「研究」（13.8%）が多く、勤務形態では「フルタイム」（91.5%）が圧倒的に多い。

学科別では業種としては、児童は「教育」、住居は「建設」、食物は「製造」と「教育」、理Ⅰ（物理・化学）は「製造」、理Ⅱは「教育」と「研究」、理Ⅰ（数学）は「情報処理」と「製造」、被服は「教育」と「製造」、家庭経済は「金融」などの業種につくものが多

表Ⅲ-26

卒業直後の進路（人・%）

	昭和　後期　卒業年次別				昭和前期
	1951～1960 (244)	1961～1970 (345)	1971～1980 (561)	1981～1990 (652)	1929～1945 (1040)
さらに勉学を続けた	12 4.9	23 6.7	41 7.3	52 8.0	20 1.9
職業についた	159 65.2	257 74.5	458 81.6	583 89.4	423 40.7
社会的な活動をした	3 1.2	——	——	——	9 0.9
実家（家業）に従事した	3 1.2	5 1.4	5 0.9	2 0.3	16 1.5
稽古ごとなどの修業をした	15 6.1	15 4.3	11 2.0	4 0.6	115 11.1
家事の手助けをした	5 2.0	8 2.3	8 1.4	3 0.5	82 7.9
結婚した	45 18.4	36 10.4	35 6.2	8 1.2	278 26.7
その他 不明	2 0.8	1 0.3	3 0.5	——	97 9.4

く、それぞれ専門を生かした方向に進んでいると言える。職種については、児童は「教員」、食物は「事務・秘書」、理Ⅰ（物理・数学）は「ＳＥ」に、理Ⅰ（化学）と理Ⅱは「研究」、住居は「設計」、被服は「事務・秘書」と「教員」、家政経済は「事務・秘書」などの職種につくものが多い。

回生別では（後出の表Ⅲ-28～Ⅲ-30参照）、まず業種としては1期生の場合「教育」に4割のものがついているのに対し、2、3期生ともに減少し、4期生では1.5割にまで減少している。一方3期生では1割弱にすぎなかった「製造」が増え、4期生の1／4が従事し、しかも4期生で一番多くのものが従事している業種となっている。そのほか「調査・研究」に従事しているものが1期生に1割いたのに対し、2、3期生ともに減少し、4期生にはほとんどいないこと、それに引き替え1、2期生にはほとんどみられなかった「金融」についているものが、4期生に1割いることなど、社会的背景の変

化により、つく業種も変化していることがうらづけられる。

次に職種については、全体的に一番多い「事務・秘書」は1、2期生よりも、3、4期生に従事するものが多くなっているが、「教員」に従事するものは、1期生が一番多く3割強のものがいたのに対し、2、3期生と減少し、4期生は1.5割にまで減少している。また1、2期生にはほとんどみられない「ＳＥ（システムエンジニアリング）」が、4期生に1割いるのが新しい動きと言える。

なお勤務形態については、回生による差はほとんどみられない。

6）卒業後の家政学部像

卒業後の家政学部像としては、卒業後の就職の変化及び再教育、さらに家政学部で学んだことが卒業後の日常生活、職業、社会的な活動など、これまでの生活にどの程度生かされているかと言う観点からとらえる。

（1）卒業以降の就業経験

大学を卒業してから現在までの状況については、前述したように8割のものが卒業直後就職しているが、その後の経過（卒業以降の就業経験）を表Ⅲ-27に示す。

全体的には「現在職業についていないが過去に就業していたことがある」（37.1％）とするものが一番多く、「現在は就業しているが就いていなかった時期がある」（21.6％）「ずっと職業に就いている」（20.6％）とするものが多く、何らかの形で職業（アルバイト・内職は除く）に就いたことのあるものが（90.2％）圧倒的に多い。

表Ⅲ-27

就業経験の有無　（人・％）

	ずっと職業に就いている	現在就いているが就いていない時期もあり	現在アルバイト：過去に就いたことがある	現在職業に就いていないが過去に就いていた	職業に就いたことないアルバイト内職はある	収入をともなう仕事をしたことがない
1951-1960（238）	27 11.3	41 17.2	9 3.8	112 47.1	18 7.6	31 13.0
1961-1970（334）	40 12.0	95 28.4	40 12.0	110 32.9	23 6.9	26 7.8
1971-1980（558）	103 18.5	153 27.4	83 14.9	165 29.6	33 5.9	21 3.8
1981-1990（650）	197 30.3	95 14.6	62 9.5	274 42.2	18 2.8	4 0.6
昭和後期(1780)	367 20.6	384 21.6	194 10.9	661 37.1	92 5.2	82 4.6
昭和前期（918）	58 6.3	150 16.3	433	47.2	49 5.3	228 24.8

『高等教育修了まで、全体が軍国主義教育一色の中で過ごしてきたと言って良い昭和前期の卒業生の場合』（昭和前期の女子教育P251）、就業経験をしたものは全体の7割で、まったくしたことのないものが3割である。調査時点に職業についていたものは2割を占めている。それに対し昭和後期は、就業経験をしたものが全体の9割となり1.5倍に、現在も職業についているものは4割となり2倍に増加している。したがって時代の変化とともに、5人に1人から5人に2人へと現職を持つものが増加していると言える。

回生別では（表Ⅲ-27参照）、卒業後いわゆる「職業に就いたことがない」とするものが1期生に約2割いるのに対し、2期生は1.5割、3期生は1割弱と減少し、4期生の場合就業経験のないものはほとんどいないと言うのが実状である。それに対し「ずっと職業に就いている」とするものは1、2期生の場合1割にすぎないのが、3期生では2割弱となり、さらに4期生の場合は約1／3の割合を占めるまで増加している。いずれにせよ現在就業しているものが（卒業後からずっと及び現在就業しているものを合わせる）、1期生に3割、2期生には4割いるが、3、4期生では4.5割にとどまっており、若干増加しているにすぎない。というのは4期生に現在「職業に就いていないが過去に就業していたことがある」とするものが、2、3期生に比べ多くなっているのが顕著である。これは子育てなどによる退職などの影響によるものと考えられる。

なお卒業直後から転職（第1回目）及び現職にいたるまでに、業種、職種、勤務形態がどのように変化しているかを示したのが、表Ⅲ-28～Ⅲ-30である。

表Ⅲ-28　　業種の変化　卒業時から現在

	卒業直後		転職（1回目）		現　職	
1951～1960	教育	41.8%	教育	46.8%	教育	52.5%
	サービス	11.6	その他	12.8	その他	15.0
	建設	11.0	医療福祉	10.6	医療福祉	12.5
1961～1970	教育	30.9	教育	38.2	教育	45.8
	建設	13.0	その他	14.7	その他	11.5
	公務	10.2	建設	10.8	医療福祉	10.4
1971～1980	教育	25.3	教育	30.3	教育	39.6
	製造	13.5	建設	13.7	建設	13.9
	建設	10.4	医療福祉	8.0	医療福祉	9.6
1981～1990	製造	25.5	教育	19.8	教育	25.8
	教育	15.3	建設	12.4	製造	12.9
	金融	10.8	医療福祉	11.3	医療福祉	11.8

％の多い　上位3種を提示する

表Ⅲ-29　職種の変化　卒業時から現在

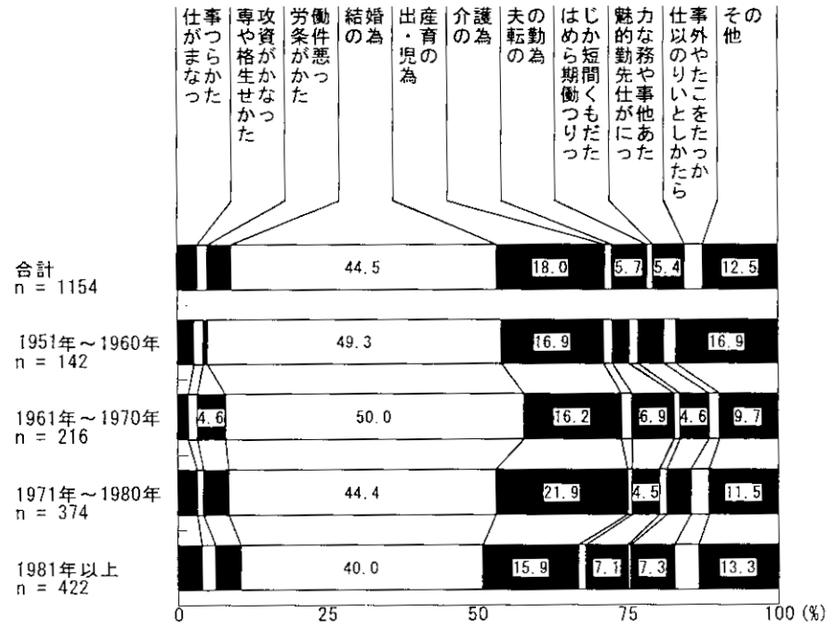
	卒業直後		転職（１回目）		現　職	
1951～1960	教員	36.1%	教員	42.0%	教員	40.5%
	研究	16.3	その他	12.0	その他	26.2
	事務秘書	15.6	事務秘書	12.0	設計	11.9
1961～1970	教員	24.1	教員	29.5	教員	35.8
	研究	19.6	その他	16.8	その他	17.9
	事務秘書	13.5	事務秘書	15.8	事務秘書	16.8
1971～1980	事務秘書	31.0	事務秘書	25.4	教員	36.1
	教員	22.3	教員	24.9	事務秘書	18.9
	研究	11.6	その他	14.1	その他	13.3
1981～1990	事務秘書	25.0	事務秘書	26.1	教員	26.6
	教員	15.5	設計	13.1	事務秘書	22.6
	研究	12.4	その他	12.5	その他	16.4

%の多い　上位３種を提示する

表Ⅲ-30　勤務形態の変化　卒業時から現在

	卒業直後		転職（１回目）		現　職	
1951～1960	フルタイム	89.1%	フルタイム	58.3%	非常勤	36.6%
	非常勤	4.1	非常勤	25.0	フルタイム	31.7
			パートタイム	8.3	自営業	17.1
1961～1970	フルタイム	89.1	フルタイム	47.9	フルタイム	51.0
	非常勤	5.3	非常勤	21.9	非常勤	21.9
			パートタイム	13.5	自営業	14.6
1971～1980	フルタイム	88.1	フルタイム	43.4	フルタイム	51.4
	非常勤	5.2	パートタイム	18.5	非常勤	16.4
	アルバイト	4.5	非常勤	15.6	自営業	13.7
1981～1990	フルタイム	96.3	フルタイム	53.4	フルタイム	69.1
			パートタイム	13.2	自営業	9.1
			非常勤	13.2	非常勤	9.1

%の多い　上位３種を提示



図Ⅲ-２．退職した理由

全体的には業種、職種ともに、卒業直後、転職そして現職ともに「教育」にたずさわるものが多く、女性の職業として継続が可能である業種、職種であるといえる。特に業種については、１期から３期生までは卒業直後、転職（１回目）、現職ともに一貫して「教育」に従事しているものが一番多いが、４期生のみ卒業直後は「製造」についているものが多いのが異なる点である。一方職種については、１、２期生ともに「教員」が、卒業直後、転職、現職ともに一番多くなっているのに対し、３、４期生は卒業直後、転職時において「事務・秘書」につくものが一番多くなっているが、現職は「教員」の方が多いなど、回生によりやや異なりがみられる。なお勤務形態については、いずれの回生も卒業直後、転職、現職による違いはほとんどみられない。すなわちいずれの時期においても「フルタイム」が多くなっているが、卒業直後より、その割合は少なくなっている。特に１期生の場合は、卒業直後、転職時ともに「フルタイム」が多かったのに対し、現職では「非常勤・臨時」が一番多いこと、２、３、４期生の場合卒業直後の「フルタイム」の割合は、転職により若干減少しているが、現職ではまた増加している。しかし転職、現職ともに「非常勤・臨時」あるいは「パートタイム」とするものが多くなっているのが目立つ。

さらに最初の勤務先を退職したその理由についてみる。図Ⅲ-２に示すように職業を

やめる第1の理由は「結婚のため」(44.5%)があげられ、次に多いのが「出産・育児のため」(18.0%)である。特に食物、理Ⅰ(化学)、被服、家政経済では前者の理由で退職するものの割合が多いのに対し、理Ⅰ(数学)、理Ⅱ、住居、児童では後者の理由をあげるものも多い。これら退職理由については回生による差はほとんどないが、「結婚のため」を退職理由とするものは、1期生に比べ、4期生の方が少なくなっているのに対し、「仕事がつまらなかった」「専攻や資格が生かせなかった」「労働条件が悪かった」など仕事に関する理由をあげるものが、1期生よりも4期生の方が多くなっているのが特徴的である。これらの理由以外に自由記述で退職理由を記入したものは、全体的に184人いるが、「体をこわした・体調をくずした」「会社・仕事に対する疑問」「会社側の都合(リストラ、縮小、移転など)」あるいは「家業に就く・自営業に変更」「故郷(実家)に戻る」「進学」「自分の能力の限界を感じて」などをあげるものが多い。これらの退職理由のうち「体をこわした・体調をくずした」という理由は、回生にかかわらずどの回生も一番強い要因となっている。その他1期生(33人)の場合は、「定年退職」とするものが多いのに対し、2期生(27人)になると「結婚との両立が難しい」「会社の同僚と結婚したため」など会社の中での立場や家族との関係に関する理由があげられている。さらに3期生(58人)では、「業務縮小のため解雇」「会社の都合による契約打ち切り」など会社側の都合や「生活に変化をつけたかった」「思想的にあわなかった」「仕事に対し自分の限界を感じた」など会社・仕事に対する疑問や自分に対する考えからの理由があげられている。特に4期生(66人)の場合も3期生と同様に「会社側の都合(解散、リストラ、移転)」も多くあげられているが、勉強するため、大学院へなどの「進学」を理由とするものが多くなっており、回生により退職の理由に異なりがあることが示される。

(2)社会的活動の経験

定期的な収入をともなう職業生活以外に、社会的な活動を経験したか、その有無についてみたのが表Ⅲ-31である。

表より「現在活動している」とするものが一番多いが(38.7%)、「過去に活動経験がある」「活動経験なし」「今後活動してみたい」とするものを合わせると、現在活動していないとするものの方が多くなる(61.3%)。この社会活動参加状況を昭和前期と後期卒業生とを比較すると、昭和前期は活動経験があるものと活動経験のないものとにほぼ2分されるのに対し、昭和後期は活動経験があるものと経験のないものとの割合は2:1となり、社会活動に参加経験のある者が多くなっている。

ちなみに学科別では、社会福祉に現在活動および活動したことがあるとする活動経験者が一番多いのに対し(83.1%)、次に多いのが児童、食物、理Ⅱ、住居、被服、家政

経済(63.3%以上)で、理Ⅰ(物理・化学・数学)の活動経験者(50%台)が少なくなっている。

回生別では「過去に経験したことがある」とするものを「現在活動している」とするものと合わせた割合は、1期生が最も多く、2、3期生と徐々にその割合は減少し、1期生で社会活動を経験しているものは半数以下になり、「活動経験なし」とするものが1/3を占める。しかし「今後活動してみたい」とするものは、1期生が最も少なく、2、3期生になるほどその割合は増加し、4期生が最も多いのも事実である。

表Ⅲ-31

社会的活動経験の有無　(人・%)

卒業年次	現在活動している	過去に経験したことあり	活動経験なし	今後活動してみたい
1951～1960 (246)	91 41.0	79 35.6	40 18.0	12 5.4
1961～1970 (346)	141 43.3	106 32.5	43 13.2	36 11.0
1971～1980 (562)	229 41.5	159 28.8	93 16.8	71 12.9
1981～1990 (653)	208 33.1	101 16.1	195 31.1	124 19.7
昭和後期 (1728)	669 38.7	445 25.8	371 21.5	243 14.1
昭和前期 (840)	135 16.1	295 35.1	410 48.8	---------

これら社会的活動の種類としては、「地域団体(例えば公立校のＰＴＡ、地域の女性学級、婦人会、子供会、町内会など)」が最も多く(66.1%)、次に多いのが「趣味サークル」(26.0%)「有志団体(私学ＰＴＡ、大学婦人協会、ＹＷＣＡ、障害を持つ子の会など)」(19.5%)で、全体の2割のものがこれらの活動にたずさわっている。

回生別では、どの回生も「地域団体」の活動を経験しているものが一番多く(1期生62.2%、2期生65.3%、3期生75.4%、4期生57.1%)、次に多いのが「趣味サークル」(25.4%～26.7%)であるという傾向は同じである。しかし3番目に多いのが、1期生の場合「社会福祉団体」(22.6%)、2期生は「有志団体」(21.5%)と「社会福祉団体」(21.1%)を、3期生は「有志団体」(21.2%)を、4期生は「研究団体」「有志団体」(14.9%)を経験しているものが多いなど、やや違いがある。

なおその他として自由記入(120人)された社会的活動も多岐にわたっているが、回生にかかわらずボランティア活動、生協・生活活動、消費者・リサイクル運動などで活動しているものが多い。

さらに社会的な活動以外に、国及び地方自治体の議員、各種審議会委員、教育委員、

社会教育委員、家裁調停委員、人権擁護委員、民生委員、児童委員、保護司などの公職の経験については、表Ⅲ-32に示すように「経験したことはない」とするものが圧倒的に多く（89.2%）、「現在ついている」（7.5%）とするものは非常に少なく、「過去に経験したことがある」（3.4%）とするものを含めても1割しかいない。昭和前期と後期では、その割合は多少異なるが、傾向は同じである。すなわち「経験なし」が一番多いが（80.9%）、その割合は昭和前期の方が少ない。しかし「現在就いている」（10.3%）、「過去に就いたことあり」（8.7%）とを合わせたいわゆる経験のある者は昭和前期の方が多い。

表Ⅲ-32

公職経験の有無　（人・%）

	現在就いている	過去に就いたことあり	就いたことなし
1951-1960（133）	19 14.3	10 7.5	104 78.2
1961-1970（211）	29 13.7	9 4.3	173 82.0
1971-1980（333）	17 5.1	10 3.0	306 91.9
1981-1990（274）	6 2.2	3 1.1	265 96.7
昭和後期（951）	71 7.5	32 3.4	848 89.2
昭和前期（823）	85 10.3	72 3.4	666 80.9

回生別では、「経験したことがない」とするものがどの回生も一番多くなっているが、4期生が最も多く（96.7%）、3期生（91.7%）、1期生（82.0%）と減少し、1期生（78.2%）が最も少ない。公職に「現在ついている」ものは1期生に14.3%、2期生13.7%、3期生5.1%、1期生は2.2%となり、若い回生になるほどその割合は少なくなっている。したがって現在公職についているものは、3、4期生のいわゆる高齢のグループが中心となっていると言える。

なお「実際についている」あるいは「これまでに経験したことのある」公職としては、自由記述であるため、かなり種々さまざまな公職があげられているが、大きくまとめると表Ⅲ-33のようになる。表より審議会委員をしているものが回生にかかわらず一番多い。

その他1、4期生に児童委員・保護司・青少年委員を、3、4期生に家裁調停委員になっているものが多いのが目立つ。

表Ⅲ-33

公職の種類（卒業年次別）

	1951～1960	1961～1970	1971～1980	1981～1990
ＰＴＡ・町内会（会長、役員など）	1	2	0	2
児童委員・保護司・青少年委員など	6	0	5	10
相談員・推進委員（社会・地域福祉	2	2	0	6
民生委員	3	1	2	7
教育委員・社会教育委員など	1	0	2	3
家裁調停委員（建築紛争調停委員）	4	3	7	8
審議会委員	6	9	9	17
審査委員会委員	4	1	1	1
運営（策定）委員会委員	0	3	1	4
協議会・懇話会委員	0	3	5	4
統計調査委員・モニター	0	0	3	3
ボランティア	1	0	0	0
区議会議員・財団法人理事など	0	1	0	1
計	19人(28)件	18人(25)件	31人(35)件	48人(66)件

（3）卒業後の取得資格

前述したように7割強の卒業生が在学中に何らかの資格をとっていたが、卒業後さらにどのような資格をとっているかについてみると、多種多様な資格に挑戦していることが示される（表Ⅲ-34参照）。学科別では一応専門を生かした資格を取得しているものが多いが、専門のほかにも多くの資格に挑戦しているものも多いのが特徴と言える。

これを回生別でみると、1期生は100人で52種、2期生は159人で48種、3期生は227人で70種、4期生は287人で80種にわたる資格を取得している。すなわち1期生から4期生へと若年齢の卒業生になるほど、資格取得した人数、取得資格の種類が大幅に増加している。実際に取得した資格の種類は、全体的にみると回生によりその順位は異なるが建築士、小・中・高校などの教員免許、保母・幼稚園教諭などが多い（建築士の資格は1期生の15人から、2、3期生と増え、4期生では59人が、小・中・高校などの教員

免許は、1期生の9人から2期生15人、3期生20人、4期生18人と20人前後のものが、保母・幼稚園教諭はいずれの回生も10人前後が取得している)。これ以外に取得した資格としては、1期生の場合、茶道(16人)、書道(12人)、華道(11人)とするものが多いが、2期生では消費生活アドバイザー・コンサルタント(12人)、簿記やインテリアプランナー(9人)、宅地建物取引主任(8人)が、3期生では簿記(23人)が多くなり、2期生で取得した資格以外にホームヘルパーや管理栄養士(9人)、ワープロ(8人)の資格をとったとするものが多くなっている。4期生では、3期生まで多い資格取得者となっていた華道(8人)は少なくなり、情報処理技術者(34人)、簿記(28人)、管理栄養士(20人)、英語などの語学検定(17人)、博士、修士号(14人)などの取得者が増加しているのが特徴的である。

表Ⅲ-34

卒業後取得した資格(1～4期生に共通の取得資格のみ:人)

	1期生 (100)	2期生 (159)	3期生 (227)	4期生 (287)
華道	11	17	13	8
茶道	16	16	7	5
書道	12	6	4	1
建築士	15	21	45	59
小・中・高教職免許	8	15	20	18
保母・幼稚園教諭	9	12	8	9
栄養士・管理栄養士	9	10	9	20
消費生活コンサルタント・アドバイザー	2	12	13	7
インテリアプランナー(コーディネーター)	3	9	17	18
簿記	1	9	23	28
宅地建物取引主任者・住宅コンサルタント	2	8	9	11
ホームヘルパー	2	1	9	2
情報処理	0	1	4	34
英検・仏検・漢検、中国検	4	7	11	17
パソコン・ワープロ検定	0	0	8	8
衣料管理士、繊維製品品質管理士	1	1	5	9
博士・修士号取得	3	6	3	14
塾講師	1	2	1	1
臨床心理士	1	4	4	3
司書	2	3	4	3
体操関係指導員	1	5	2	2
医療事務	2	4	6	5
保険労務士	1	2	1	4
衛生管理者	1	1	1	2

(4)再教育

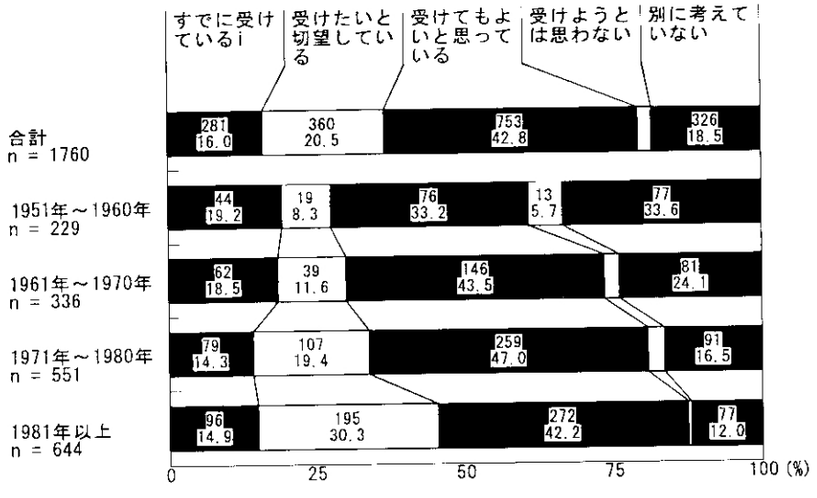
キャリアアップや再就職、社会活動のために役立つ教育などの再教育についての現状をまとめたのが図Ⅲ-3である。

全体的には、「受けても良いと思っている」(42.8%)とするものが一番多いが、「受けたいと切望している」(20.5%)とするものを合わせると、約6割のものが再教育を望んでいると言える。さらに再教育を「すでに受けている」とするものは16.0%に過ぎず、「受けようとは思わない」と「別に考えていない」とする、いわゆる必要性を感じていないものが20.8%いる。

回生別では「受けようとは思わない」「別に考えていない」とするものは、1期生に多く約4割を占めるのに対し、2、3期生になるほどその割合は減少し、4期生では1割となっている。それに引き替え「受けたいと切望している」「受けても良いと思っている」とするものが、1期生(41.5%)よりも4期生(72.5%)になるほど多くなっており、若い回生ほど再教育の必要性を感じていると言えよう。

なお今後受けたいと思っている再教育の種類としては、「大学または大学院に入学」「大学または大学院に聴講」「留学または研修」「通信教育」「各種学校・専門学校」「講座」「個人教授」などがあるが、全体的には「講座」(46.4%)をあげるものが一番多い。そのほか「大学または大学院に聴講」(25.1%)「通信教育」(24.2%)「各種学校・専門学校」(22.3%)と続いている。特に「講座」を希望するものが回生にかかわらず一番多いが、その割合は1期生に最も多く(63.7%)、2期生(57.3%)、3期生(49.0%)と減少し、4期生の希望者が最も少なくなっている(36.7%)。それに対し「通信教育」「各種学校・専門学校」を希望するものは、1期生に最も少なく4期生になるほど多くなっているなど、回生により再教育を受けたいとする内容は異なる。なお「大学または大学院に聴講」を希望するものは、回生にかかわらず2割強いるが、「大学または大学院に入学」を希望するものが2期生から徐々に増加しているのが、新しい動きと言える。

そこで日本女子大学家政学部に、大学の卒業生を対象とする再教育の制度ができるとしたら、希望するか否かについては、「希望する」(52.0%)とするものと「希望しない」(48.0%)とするものに分かれるが、どちらかと言うと希望するものの方が若干であるが多くなっている。この再教育の希望については、回生によりかなり違いがある。すなわち1、2期生には再教育を「希望しない」とするものの方が多いのに対し(64.8%、59.2%)、3期生では「希望する」ものの方が多く(53.3%)、4期生ではさらに「希望する」ものが多くなり(62.6%)、1期生の傾向とまったく逆転している。したがって若い回生に、日本女子大学に再教育の場が早急に望まれていると言える。最近生涯教育センターが設立され、多くの卒業生からアクセスがあることが報じられているが、今後



図Ⅲ-３．再教育

さらに利用者が増大していくものと思われる。

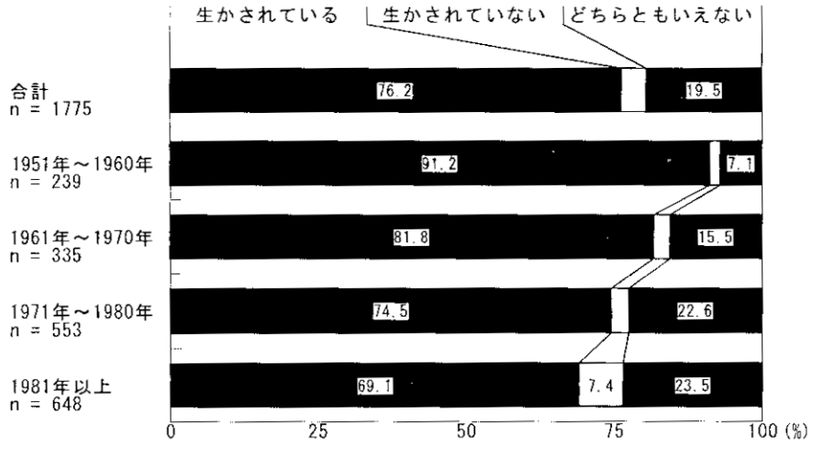
（５）卒業後の生活とのかかわり

家政学部で学んだことが、卒業後の日常生活、職業、社会的な活動など、これまでの生活に生かされているかをみたのが図Ⅲ-４～６である。

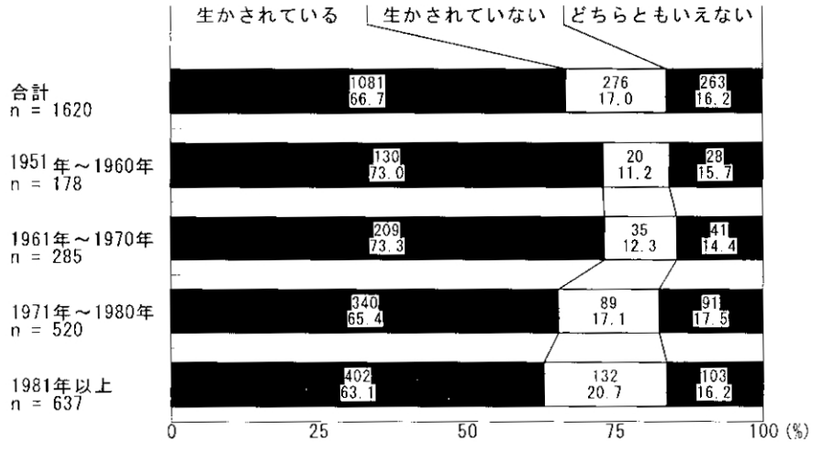
まず全体的には、日常生活に76.2%、職業に66.7%、社会的な活動に42.1%のものが「生かされている」としている。つまり日常生活及び職業には生かされているといえるが、社会的な活動には「どちらともいえない」とするものが多くなっていることから、あまり生かされていないと言える。

学科別では日常生活に対しては、食物、被服、児童、社会福祉、住居、家政経済、理Ⅱに生かされているとするものが多いのに対し（ほぼ70%以上）、理Ⅰに生かされているとするものが前述の学科に比べ少ない。特に理Ⅰ（物理）に生かされていないとするものが約1／4もいるのが目立つ。一方職業については、生かされているとするものが最も多いのは住居であるが、児童、食物、社会福祉、理Ⅰ（数学）も比較的多くなっている。社会的な活動に対しては、社会福祉、児童（50%以上）に生かされているとするものがいるが、どちらとも言えないとするものが多く、学科による大きな違いは見られない。特に理Ⅰ、住居の卒業生の場合、社会活動に生かされていないとするものが、日常生活、職業に生かされていないとするものに比べ多いのが特徴的である。

なお回生別では、まず日常生活については１期生の９割のものが「生かされている」



図Ⅲ-４．日常生活への影響

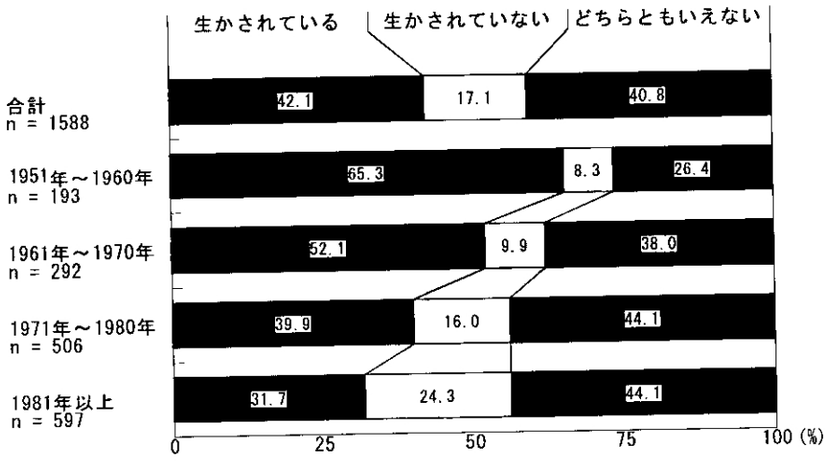


図Ⅲ-５．職業への影響

としているのに対し、その割合は減少し4期生では7割になり、「どちらともいえない」とするものが2割強を占めている。次に職業については、日常生活ほど急激ではないが、やはり1、2期生より3、4期生の方が「生かされている」とするものの割合は減少し、「生かされていない」とするものが1割から2割と増えている。さらに社会的な活動についても回生により大きく変化している。すなわち1期生では「生かされている」とするものが6割を占めているのに対し、4期生では3割までに減少している。特に「生かされていない」とするものが1期生の1割弱から4期生の2割強に増えているのが特徴的である。したがって高齢世代の日常生活、職業、社会的な活動には生かされていると評価されているが、若い世代には必ずしも生かされていると評価されているとはいえない。

さらに、これらの生かされているとする理由を示したのが表Ⅲ-35である。表よりまず日常生活に生かされている理由としては、「良い友人を得ることができた」(48.6%)「広い視野で考えることができるようになった」(46.2%)「専門知識や技能が身についた」(44.0%) などをあげるものが多い。回生別では「広い視野で考えることができるようになった」とするものが1、2、3期生に一番多いのに対し、4期生では「良い友人を得ることができた」としたものの方が多いこと、1期生に「生きていく上で精神的な支えを得た」とするものが、2、3期生に「自分の価値観を形成できた」とするものが多いなど、回生により多少差異がみられる。

次に職業に生かされている理由としては、「専門知識や技能が身についた」とするも



図Ⅲ-6．社会的活動への影響

表Ⅲ-35

日常生活・職業・社会的な活動に生かされている理由　(人・%)

		専門知識や技能が身についた	社会的に評価の高い大学をでた	広い視野で考えることができるようになった	良い友人を得ることができた	自分の価値観を形成できた	生きていく上で精神的な支えを得た	人とのつきあい方が身についた	良い教員と出会うことができた
日常の生活	1951～1960	82 40.0	10 4.9	97 47.3	94 45.9	62 30.2	81 39.5	26 12.7	13 6.3
	1961～1970	109 40.5	12 4.5	131 48.7	127 47.2	96 35.7	80 29.7	25 9.3	18 6.7
	1971～1980	178 43.7	34 8.4	210 51.6	185 45.5	171 42.0	98 24.1	48 11.8	35 8.6
	1981～1990	214 48.3	42 9.5	174 39.3	237 53.5	157 35.4	88 19.9	63 14.2	50 11.3
職業	1951～1960	86 71.7	24 20.0	47 39.2	15 12.5	27 22.5	8 6.7	19 15.8	20 16.7
	1961～1970	148 74.0	44 22.0	74 37.0	27 13.5	38 19.0	24 12.0	16 8.0	48 24.0
	1971～1980	255 77.3	82 24.8	111 33.6	43 13.0	85 25.8	42 12.7	40 12.1	67 20.3
	1981～1990	320 82.9	92 23.8	123 31.9	42 10.9	83 21.5	37 9.6	49 12.7	86 22.3
社会的活動	1951～1960	17 14.7	26 22.4	73 62.9	36 31.0	26 22.4	28 24.1	38 32.8	3 2.6
	1961～1970	29 20.0	20 13.8	84 57.9	39 26.9	48 33.1	16 11.0	33 22.8	4 2.8
	1971～1980	35 17.9	33 16.8	116 59.2	31 15.8	70 35.7	35 17.9	58 29/6	19 9.7
	1981～1990	48 26.2	30 16.4	99 54.1	36 19.7	61 33.3	40 21.9	64 35.0	14 7.7

のが (78.1%) 圧倒的に多い。次に多いのが「広い視野で考えることができるようになった」(34.3%) であり、この2つの理由が、どの回生においても主な理由としてあげられている。そのほかの理由として1、3期生に「自分の価値観を形成できた」を、2、4期生には「良い教員と出会うことができた」とするものが多いのが特徴的である。

さらに社会的な活動に生かされている理由としては、「広い視野で考えることができるようになった」(58.1%)「自分の価値観が形成できた」(32.0%)「人とのつきあい方が身についた」(30.2%) をあげるものが多い。これらの理由はどの回生でも多くのものがあげている理由であるが、1期生の場合「良い友人を得ることができた」「リーダーシップが身についた」をあげるものが、「自分の価値観が形成できた」とするものより多いこと、また2期生もこの二つの理由をあげるものが、「人とのつきあい方が身についた」をあげるものより多くなっているなど、回生により生かされている理由はやや異なっている。

以上日常生活、職業、社会的な活動への影響は回生によって多少異なっているが、生かされているとする理由の大枠には、それほど大きな差異はみられないと言える。

なお社会活動を経験したもので、家政学部で学んだことが生かされているとするもののその社会活動の種類との関係をみると、社会福祉団体の活動をしたものの63.8%が、また有志団体の活動をしたものの61.1%、地域団体の活動をしたものの51.8%が生かされているとしている。一方現在職業についている卒業生で、職業に生かされているとしたものは76.1%いるが、現在の業種との関係をみると教育（184人中）についているものの90.8%が生かされているとしている。なお全体的に就いている人数は限られているが、建設（47人中）についているものの91.4%が、調査・研究（13人中）についているものは全員が、また医療福祉（54人中）についているものの64.8%が、家政学部の教育が生かされていると評価している。従って限られた範囲であるが、家政学部の教育はかなり卒業後の生活に生かされていると判断できる。

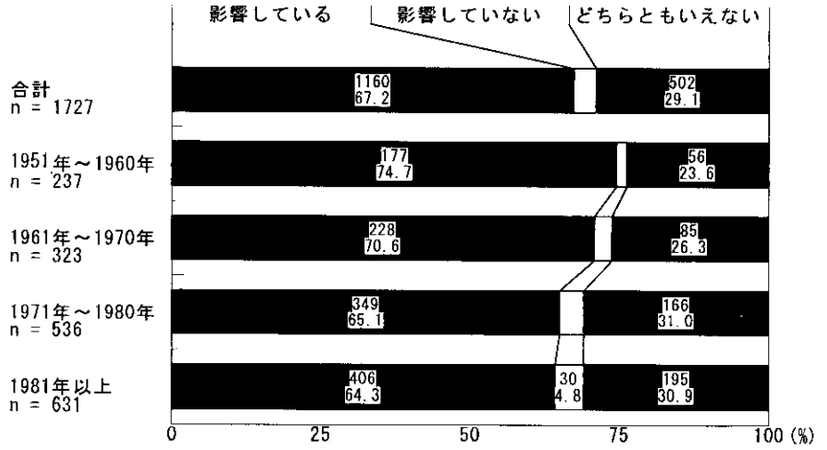
（6）全人的発達への影響

家政学部の教育が、自分の全人的な発達にどのように影響していると考えているかについて示したのが図Ⅲ-7である。

図より全人的発達に「影響している」とするものが一番多く67.2%を占める。しかし「どちらともいえない」とするものも29.1%いる。ちなみに学科別では、食物、社会福祉、児童では70%以上のものが、家政経済、被服、住居、理Ⅱでは60%以上のものが「影響している」としている。理学系では理Ⅱ、理Ⅰ化学、数学、物理の順に「影響している」とするものの割合は減少し、理Ⅰ数学では「どちらともいえない」とするものと「影響している」とするものの割合が同一になり、物理の場合は「どちらともいえない」とするものの割合の方が多くなっている。しかも「影響していない」とするものが14.0%を占め、他の学科と異なっている。したがって理系出身者の人的発達にとっては、家政学部の教育はあまり効力を発揮していないと受けとられていると言える。

回生別では、「影響している」とするものの割合が一番多いのは、いずれの回生にもみられる傾向であるが、その割合は1期生より2期生、2期生より3期生になるほど減少し、4期生に「影響している」とするものが一番少なくなっている。しかも非常にわずかではあるが、「影響していない」とするものが他の回生に比べ多くなっている。しかし総体的には家政学部の教育が家政学部卒業生の全人的発達に、何らかの影響を与えているということが裏づけられる。

この全人的発達へ影響しているとするその内容（自由意見）をまとめると（表Ⅲ-36参照）、大きく8つに分類することができる。すなわち「人との出会い」「学校の伝統や雰囲気・寮生活」「人格形成」「教育」「教育理念（建学精神）」「家政上の技術・日常生



図Ⅲ-7．全人的な発達への影響

活」「自信・誇り」などである。これらの自由意見のうち、全体的に一番多いのが「人との出会い」に関する意見であり、次に多いのが「人格形成」および「学校の伝統や雰囲気・寮生活」に関する意見である。そのほか「教育」「教育理念（建学精神）」「家政上の技術・日常生活」「職業」の順に減少し、「自信・誇り」に関する意見が最も少ない。

回生別では表Ⅲ-36に示すように、全人的発達へ影響した内容として、1期生は「教育理念（建学精神）」「学校の伝統や雰囲気・寮生活」に関する意見が多いのに対し、2期生は「人格形成」「教育」「学校の伝統や雰囲気・寮生活」に関する意見をあげるものが多い。この1、2期生の場合、ともに「職業」に影響したとするものは最も少ない。一方3、4期生では、両期生ともに「人との出会い」をあげるものが一番多く、次に多いのが「人格形成」であり、続いて「学校の伝統や雰囲気・寮生活」「教育」となっている。さらに3期生の場合「家政上の技術・日常生活」が、4期生の場合「自信・誇り」にかかわる影響を記述したものが一番少なくなっているのが目立つ。従って高齢の世代と若い世代とで全人的発達への影響としてのとらえ方は、やや異なっていると言える。

ちなみに自由記述された全人的発達への影響の一部をあげると以下のようになる。

まず［人との出会い］としては、「すばらしい先生、友人、先輩に会えた」（4食物）、「素晴らしい先輩にであい、多くのことを学んだ」（16被服）、「先生方の後ろ姿から、女性の生き方、たくましさを教えてもらった」（26住居）、「4年間学べたことは、色々な人達と出会え、視野が広がり、色々な意味で人間的に幅がでたと思う」（40児童）、〔学

表Ⅲ-36

家政学部の教育による全人的発達への影響（回生別自由意見）

（件・%）

	1951～1960 1期生	1961～1970 2期生	1971～1980 3期生	1981～1990 4期生
人との出会い	14 11.4	25 14.5	63 25.1	77 28.5
学校の伝統や雰囲気・寮生活	25 20.3	31 18.0	42 16.7	50 18.5
人格形成	15 12.2	35 20.3	51 20.3	59 21.9
教育	11 8.9	33 19.2	32 12.7	23 8.5
教育理念（建学精神）	27 22.0	23 13.4	22 8.8	17 6.3
職業	8 6.5	5 2.9	13 5.2	19 7.0
家政上の技術・日常の生活	11 8.9	14 8.1	11 4.4	17 6.3
自信・誇り	12 9.8	6 3.5	17 6.8	8 3.0
	123	172	251	270

校の伝統や雰囲気・学生生活〕としては、「大学教育よりも寮生活の経験の方が大きな影響と恩恵を受けている」（９食物）、「ゆるやかな自由さがあったように感じている」（20住居）、「伝統ある大学に学べたことが、自分の支えになっていたような気がする」（24児童）、「日本女子大の校風やそこで学んだことは、自分の自立の後ろ楯になっている」（40住居）、〔人格形成〕としては、「人間関係の大切さを学んだ」（10生芸）、「女性として家庭を守りつつ、社会にも常に目を向け、積極的に自分を生かす道を心がける精神を得た」（20食物）、「ものごとを公正にみて、広い視野で考えることができ、自分自身の人間形成の上で土台になったような気がする」（23理Ⅱ）、「自立の精神と寛容の精神を身につけることができた」（31被服）などを、また［教育］としては「基礎を学んでいるので、理解が深くできている」（５食物）、「衣食住という土台をしっかり学んだため、あらゆる情報をキャッチしやすい」（20理Ⅰ化学）、「女性として、一人の人間として自立し、自分の考え、展望をきちんと持つことができるようになったのは、家政学部の教育を受けたからと思っている」（25児童）、「女性として社会に貢献できるための精神的教育を受けることができた」（31食物）、［教育理念］としては、「日本女子大の教育理念（三大綱領）が私の人生の基礎となっている」（２社会福祉）、「本学の建学の精神が日常の支えとなっている」（20食物）、「創立者の教育理念は今も仕事に、人生に生

かされている」（29児童）、「創立者の教育理念が、いつも頭の片隅にある気がする。迷ったことがある時など頭に浮かんでくる」（36被服）、さらに［職業］としては、「専門的職場に入社できたこと、その経験で資格を取ることができた。20年後その資格を活かすことができた」（６生芸）、「女性が職業をもち働くことを学んだ」（12家政経済）、「職場において日本女子大出身者は、意欲・能力があると評価されていた」（25被服）、「今の職業を選択する基盤となった」（31食物）、［家政上の技術・日常生活］としては、「勉強したことの基礎的な知識を生活の上で活かされている」（６生芸）、「食生活・住居に学んだことが生かされている」（17理Ⅱ）、「主婦になった時少なからず役立っている」（28家政経済）、「健康で幸せな人生を送るために、親として子育てをするためにも役だっている」（33食物）、そして最後の［自信・誇り］としては、「日本女子大で学んだという自信とプライドは、前向き志向の行動ができる」（９生芸）、「家庭生活における知識が身につき自信がついた」（11食物）、「実生活で具体的に出身校のことが関係することはないが、自分に自信をもって生活できる」（22家政経済）、「社会的に評価の高い大学を卒業したという誇りをもって生きていける」（35住居）などである。

これら具体的な意見からも、家政学部の教育は卒業生の多くの全人的発達に影響し、しかも一人一人の生きてきた時代および社会環境の変化あるいは年齢に関わらず、着実に浸透していることが明らかに示されている。

日本女子大学家政学部100年研究会

江　澤　郁　子（研究代表者・名誉教授・戸板女子短期大学学長）
一番ヶ瀬　康子（名誉教授）
館　岡　　孝（名誉教授）
大　野　静　枝（名誉教授）
小　川　信　子（名誉教授）
宮　崎　礼　子（名誉教授）
沖　田　富美子（住居学科教授）
佐々井　　啓（被服学科教授）
真　橋　美智子（教育学科教授）
赤　塚　朋　子（宇都宮大学助教授）
塚　原　典　子（新潟医療福祉大学助教授）

日本女子大学家政学部100年の歩み

日本女子大学家政学部100年研究会　編

2006（平成18）年5月20日　初版第2刷発行

発行者　日本女子大学家政学部100年研究会

〒112－8681　東京都文京区目白台2－8－1

印刷・製本　有限会社　三秀美術印刷